

佐伯市戦後五十年史（二五）

池田市政と

産業・都市基盤の整備

矢野 彌生

（会員 佐伯市中山区）

〈前号〉

一四 池田市政三期十二年の歩み

（一）池田市政の発足と経過

（二）広域市町村圏の発足

一五 池田市政と産業・都市基盤の整備

（一）第一次産業

昭和四十五年（一九七〇）の国勢調査による佐伯市の第一次産業の就業人口は四四五二人で、農業が三八九〇人（全体の八七・四％）で最も多く、水産業三七七人（八・五％）、林業・狩猟業一八五人（四・二％）となっ

ている。また、第一次産業の就業人口率は一八・六％で、全国平均一九・三％より低い。

農家と経営耕地

〈農家戸数・経営耕地面積とも減少傾向〉

佐伯市における昭和四十五年と同五十年の農家数及び経営耕地面積をみると第1表のとおりである。すなわち、第1表で明らかのように農家戸数・経営耕地ともに減少傾向にあることが分かる。また、昭和四十五年から同五十年の五年間に農家戸数は三七戸（一一・五％減）、経営耕地は二二

第1表 農家と経営耕地

（単位：戸、h）

区分	農 家 数				耕 地 面 積				
	総 数	専 業	第1種兼業	第2種兼業	総 数	田	普通畑	樹園地	牧草地
昭和45	2,985	362	655	1,968	1,920	1,140	285	495	—
50	2,613	260	344	2,009	1,692	978	244	470	—

〔県南の市町村別農林統計書〕九州農政局大分統計情報事務所佐伯出張所平成5年による

八(ハ)一・九(ト)減」と大幅に減少している。

これは、昭和四〇年代は我が国の経済の高度成長期にあたり、産業構造が大きく変化してきたことが大きな要因である。さらに、国の減反政策や労働力不足などで農家の農業経営意欲の減退に伴う農地の耕作放棄による荒廃化も見逃せない。減少の主原因を農地法による転用実績でみると、住宅用地がもつとも多く、次いで会社工場用地(主として商業サービス)の順位となっている。また、佐伯市の農家の一戸当たりの経営規模も平均〇・六(ト) (昭和四十五年・五十年)と零細であるのも要因であらう。

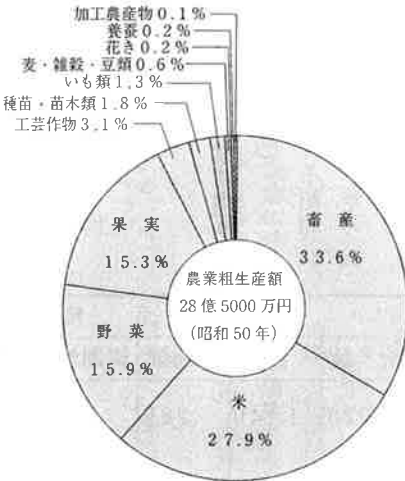
畜産・米・野菜 (畜産・米・野菜・果実で九〇(ト)をこ果実が四大農産物 える生産額) 佐伯市における昭和五十年(一九七五)の農業粗生産額をみると、第二表・第一図のとおりである。この表・図で明らかのように、昭和五十年の農業粗生産額は二八億五〇〇〇万円である。部門別に見ると、畜産が全体の三三・六(ト)を占めて多く、次いで米二七・九(ト)、野菜一五・九(ト)、果実一五・三(ト)が多くを占め、この四部門で九〇(ト)をこえる四大農産物となっていることが分かる。

第2表 部門別農業粗生産額

(単位: 100万円, %)

区分	昭和45		昭和50	
農業粗生産額	1,841	100.0	2,850	100.0
耕種計	1,216	66.05	1,885	66.14
米	441	23.95	796	27.93
麦・雑穀・豆類	28	1.52	18	0.63
いも類	18	0.98	38	1.33
野菜	284	15.43	453	15.89
果実	302	16.40	436	15.30
花き	—	—	5	0.18
工芸作物	33	1.79	87	3.05
種苗・苗木類その他	110	5.98	52	1.83
養鶏	14	0.76	4	0.14
畜産計	607	32.97	958	33.61
肉用牛				
豚				
鶏				
その他の家畜				
加工農産物	4	0.22	3	0.11

(『大分農林水産統計年報』による)



第1図 農業粗生産額 (昭和50年)

(『大分農林水産統計年報』により作成)

また、農業粗生産額が第一位の畜産をみると、昭和五十年では酪農二五戸、養豚七七戸、養鶏四四戸、その他の畜産農家一四戸となっており、養豚・養鶏・酪農が畜産業の中核である。

地域別にみた（四地域に大別される農業） 昭和四十五年から同五十年ごろの佐伯市の農業の特色を地域別に概観してみよう。

まず、地区別農家数の状況をみると、第3表に示すように九地域に分けられる。さらに大別すると、①国道沿線地域の旧市内・鶴岡、②田園地域の上堅田の一部・下堅田、③主として海岸部

第3表 地区別農家数 (単位：戸)

地区別	総農家数	専業	兼業	
			農業主	農業従
旧市内	253	72	53	128
西上	253	19	89	145
八大	343	47	69	277
大入	367	8	35	324
鶴岡	424	41	68	315
堅田	397	46	87	264
上下	417	47	93	277
木立	326	57	110	159
青山	206	25	51	130
合計	2,986	362	655	1,969

(1970年度世界農林業センサスによる)

地域の木立・西上浦・八幡・大入島、④農山村地域の堅田・青山の四地域に分類される。

佐伯市の各地の農業の現状と特色について『佐伯市史』(昭和四十九年刊)をもとに紹介したい。市内の農村地帯の各地区の特色やその変遷をみよう。

鶴岡地区は、戦前もっとも広い水田耕作地区であったが、番匠川の河川改修工事で、広範囲の水田が河川・堤防敷としてつぶされた。また、国道バイパスの開設、国道二一七号線に沿った中小工場の建設、鶴岡・城西等耕地をつぶしての住宅建設が打ち続き、農業地区としての特色をすっかり失ってしまった。

堅田地区は、旧藩時代は天領で、明治以後も水田・畑地に恵まれ、重要な穀倉地帯であったが、今では養豚、養鶏など畜産に移行しつつある。

それに続く青山地区は古くからの特産、木炭の生産はほとんどなくなつたが、木材の産出は続いている。最近はまだ畜産も盛んになり、堅田と共にブロイラー(食肉用ひな)の飼育では、県下でも指折りとなっている。

木立地区は以前は湿田が多く、基幹作物に恵まれない地域であったが、今はすっかり様相が変わっている。地

区民の熱意によって大規模の耕地整理が行われたが、生産調整で米づくりは伸び悩んでいる。そのかわり、ぶどう・いちごの栽培が盛んになり、特産「木立いちご」の名は、県下に知られるようになった。昭和四十七年（一九七二）には協同いちごの経営が顕著であるとして、優良賞の栄冠を勝ち得た。この外、乳牛を飼う酪農家もあり、養豚も行われているが、やはり果物の地区として代表される。

市街地に近い女島・長島地区は、昔から新鮮な野菜と牛乳の供給地として実績があり、特に女島地区のビニール栽培が盛んである。

一方、海岸沿いの八幡・西上浦地区は戦前から一部農家で蜜柑を作っていたが、戦後一時酪農が盛んになった。しかし、今では、ほとんど全集落にわたって柑橘栽培が盛んで、その専業の傾向が強くなった。

佐伯湾に大きく広がっている大入島は、本来は甘藷と蜜柑と、そして沿岸漁業の島である。耕して天にいたる甘藷の段々畑は荒れ果て、地味のよいところは蜜柑畑である。島の南西部の海面は工場廃液で汚れ、漁業は伸び悩んでいる。

施設園芸（昭和三十八年に長島で初めてハウスによる促成栽培）の展開（成栽培実施）佐伯市における施設園芸地の形成過程について、拙稿の「大分県南の園芸農業について」をもとに、以下その概要を述べてみたい。

佐伯市では、昭和四十年（一九六五）センサスによると、約三〇〇〇戸の野菜栽培農家があるが、商品生産を目的とする農家は約六〇〇戸ある。その九〇％以上が露地栽培を主とするもので、ビニールハウスを主体とした促成栽培は少ない。佐伯市では昭和二十六年（一九五二）ごろまではトンネルの早熟栽培で、慣習的な露地栽培に多く依存していたため、促成栽培は皆無に等しい状態であった。したがって、市内の、市場でも宮崎県産の野菜におされ、年々野菜栽培は衰退の一路をたどる状態であった。

しかし、昭和三十八年に市内長島地区に蔬菜同志会が結成され、初めてハウスによる促成栽培が実施され、商品生産を目的とする企業的な近郊農業としてスタートを切ったのである。佐伯市の蔬菜促成栽培の歴史は県内で最も古いといわれながら、従来からの慣習的な露地栽培の域を長い間出なかつたのは、県南の持つ後進性、保守

性のためであるうか。

第4表にみるように、佐伯市のビニールハウスを主とする施設園芸の主役である蔬菜園芸同志会は、番匠川下のデルタ地帯の長島・女島・渡町の三地区三三戸である。聞きとり調査では、女島地区などによる施設園芸の開始は農協などの指導によっている。

この地区の鉄骨のビニールハウスは約八〇(二四〇棟)、今後五カ年計画では三〇%を増設するという(第5表参照)。

第4表 佐伯市の蔬菜同志会の規模

部落名	設立年月	参加戸数	経営反別
長島地区	S 38.4	11戸	1.2 ha
女島地区	S 38.6	15戸	4.9 ha
渡町地区	S 40.9	7戸	1.1 ha
計		33戸	7.2 ha

(佐伯農協の提供資料による)

第5表 施設の種別面積(44年)

木 骨		鉄 骨		トンネル	
5戸	0.7 ha	29戸	7.1 ha	34戸	10 ha

(佐伯農協の提供資料による)

また、最近県の野菜団地の指定地域となり、自己資金二〇%、近代化資金八〇%の割合で、加温機、灌水機(パイプ配管、ポンプを含む)等の施設費が援助され、野菜団地が上からの援助の型で進められている。したがって、この地区では、露地栽培・半促成栽培に転換しつつある。

これらの地区では、ハウスは八〇%の普及をみせているが、一〇%当たりに七〇万円以上の施設が必要と言われ、必ずしも施設園芸が軌道に乗ったと断定することはできないように思う。女島・長島・渡町の三地区を含めた佐伯市の年次別ハウス面積の推移をみると、第6表のように、昭和四十四年

第6表 ハウス面積の推移

(単位:アール)

昭和年度	38年	39	40	41	42	43	44
加温ハウス				9	77	160	450
無加温ハウス	18	102	187	263	334	600	450
計	18	102	187	272	411	760	900

(佐伯農協の提供資料による)

(一九六九)は、同四十二年の二倍以上であり、同四十年に比べると、約五倍の増加を示していることが分かる。増加率としては高いが、一戸当たりの作付面積からみれば、零細経営であり、問題がある。

野菜の種類別面積をみると、キュウリ・トマトが主要作物であり、昭和四十四年と四十二年を対比すれば、第7表で明らかのように、二倍以上の増加である。

(零細経営だが、量・質ともに向上)

女島・長島・渡町地区の蔬菜同志会員の施設園芸の性格について、その経営と経済性からみた、二、三の考察をしたい。佐伯市の施設園芸の今後の発展を考える場合にも、ハウス農家の経営の状況や経済性を考えることは重要である。

この地区の野菜同志会員の経営面積は一戸当たり約九〇坪であることから考えるとやや広い。いま、同志会員のうちからハウス農家二〇戸について経営規模別に野菜依存度をみると、第8表のとおり

第7表 野菜の種類別面積

(単位：アール)

	キュウリ	トマト	その他	計
42年	264	133	14	411
43年	340	420		760
44年	400	500		900
44/42	151.5%	375.9%		219%

(佐伯農協の提供資料による)

第8表 ハウス経営農家の経営耕地規模別野菜依存度 (昭和42年)

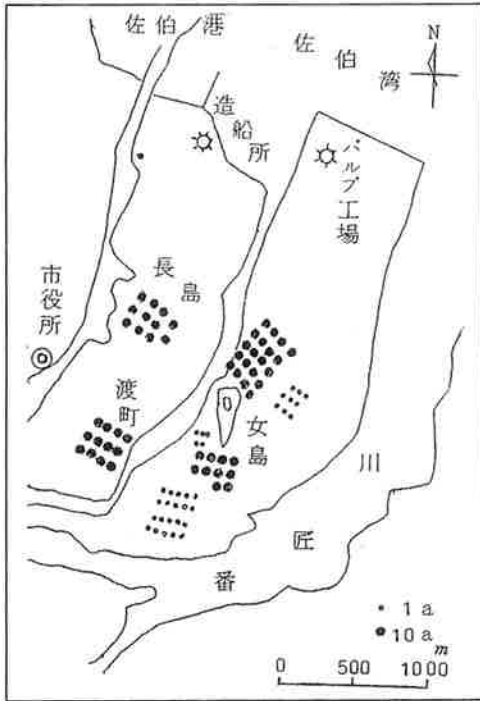
区分 経営規模	農業収入に対し野菜収入割合別農家数(戸)							野菜販売金額別農家数(戸)									
	0~50%	50~60	60~70	70~80	80~90	90~以上	計	30未満 万円	30~50	50~60	60~70	70~80	80~90	90~100	100~以上		
50a 未満																	
50~60																	
60~70			1	1	1		3			1	1				1		
70~80				1			1					1					
80~90		1	1	2	2		6			2	2			2			
90~100	1		2				3	1		2							
100a 以上		1	2	3	1		7			3				2	1	1	
計	1	2	6	7	4		20	1		8	3	1	4	2	1	1	

(佐伯農協の提供資料による)

である。すなわち、ハウス農家では農業収入のなかで、野菜収入の占める割合が高く、六〇パーセントが一七戸である。また、野菜販売金額別農家数をみても、五〇万円以上が一九戸、平均六〇万円以上と考えられ、佐伯市の一戸当たり三七万円の農業所得からすれば、これらのハウスの農家の所得は高く、その有利性が指摘できる。

いずれにしても、佐伯市の施設園芸は、一般的にいつて零細経営であるが、量・質ともに向上しつつある。しかし、長島地区は

都市化（宅地化）が著しく進んでおり、将来性は全く望めない。さらに今後、以上述べた女島・長島・渡町地区のほかに、木立・堅田、さらに隣接弥生町への進出も考えられよう。



第2図 女島地区ビニールハウスの分布  
(現地調査による。但し、渡町、長島地区は佐伯農協提供資料に基づく。)

女島地区の（佐伯の施設園芸の核心地、女島地区の促成栽培 現地調査）佐伯市の女島地区を、昭和四十四年筆者が佐伯農業高校に在職した当時、女島地区の農家を訪問して聞きとり調査を試みた。そのときの調査結果の概要を以下述べる。

女島は番匠川が佐伯湾に注ぐ川口部のデルタの沖積地に発達した集落で、戸数八六戸、ほとんど古くから農業を中心に生計を立ててきた農家である。農家の平均耕地は〇・五ヘクタール前後で

零細経営であるが、古くから佐伯市への野菜の供給地として役割を果たし、現在では野菜作りのほか酪農も十一戸が営んでおり、総頭数二一頭の乳牛を飼育し、一戸当たり二〇頭近くで、県平均の

四・二頭に比べ、約五倍で、市内最大の牛乳供給地でもある。

〔大正六年ごろ野菜園芸が始まり、県下でも古い歴史をもつ〕女島地区は昭和三年（一七六六）に開墾され、水田四二町を得たといわれるが、野菜園芸が始まったのは、大正六年（一九一七）ごろであり、油紙などによる野菜の早作りは昭和初期に始められ、半促成栽培の歴史は県下でも古い。しかし、本格的に近代施設をもつ施設園芸が開始されたのは昭和三十八年（一九六三）で、小型の木骨ハウスによる栽培から始め、昭和三十九年に三戸、四十年五戸と増加し、四十四年にはハウス農家は一六戸である。一六戸のハウス農家の一戸当たり栽培面積は平均二〇<sup>ア</sup>で、最大作付農家は五〇<sup>ア</sup>である（第2図参照）。

施設園芸による主要作物はトマト・キュウリであるが、そのほかにナス・ナンキンマメ・スイカ・メロンなども数量は多くないが栽培されている。主要作物であるキュウリの品種は久留米F<sub>1</sub>（促成栽培用）、トマトは強力五光を統一栽培している。女島地区の新しい動きとして注目されるのは、一六戸中、五戸が各自二〇<sup>ア</sup>ずつ土地を提

供し、トマトの共同経営を計画していることである。各戸二人の出役で、主に労力面の生産コストをさげることが目的としている。

同地区施設園芸農家のAさんから、今後ハウスの大型化・集団化を進めたいが、資金（設備投資）の面で、困難点が多いことが聞かされたが、そのほかにも、各戸の農業経営、技術の相異や公平な利益配分等についても問題があるようである。

また、同地区では最近、大野郡へのハウス園芸の出作りも一部みられるが、これは同地区が土地条件（湿地帯が多い）が悪いのが主因である。

佐伯市における野菜出荷は、第9表にみるように、農協八割、市場一五割、特約小売またはふり売業者七割で、農協を通じた共同

第9表 佐伯市内のキュウリの出荷

農協	市場	特約小売、ふり売業者
8%	15%	77%

（農林省大分統計調査事務所の提供資料による）



出荷は少ない。女島地区においても、そのほとんどが個人出荷で共販体制はとられていない。

最近、県のトマト栽培団地に指定され、近代化資金の借り入れも可能になり、施設園芸の発達の兆しが見られるが、幾多の問題点があり、樂觀は許されないように思う。

以上、女島地区について概要を述べたが、最後に二、三の問題点を指摘して結論にかえる。

①この地域は番匠川の川口部に位置し、水位が高く、排水不良で、湿地帯が多く、野菜の生産に不適である。そのため、客土を実施し、基盤整備が必要である（基盤整備には多額の資金が必要）。

②農家の経営が零細で、耕地が点在しているため、交換分合でもしない限り、将来経営の拡大ができない。

③以上の二点が最も根本的な問題であるが、そのほか野菜販売の場合、市場を通すよりも地場販売の方が価格が高いということは共販の面でも大きい問題であろう。また、施設園芸の若い後継者が少ないことなど、将来に問題を残す悩みが指摘される（調査に際し、ご協力を戴いた女島地区の施設園芸農家や農林省大分統計事務所の

方々にお礼申し上げます）。

木立 立 〈本格化したのは昭和四十三年、「イチゴ生  
いちご 研究同志会産」を結成してから〉 木立  
地区のいちご栽培のあゆみを少し紹介したい。新聞報道  
では、木立地区の「いちご栽培」の状況を次のように伝  
えている。

（前略）県内一の産地として、栽培に力を入れてい  
る佐伯市内での農家。現在百二十二戸が、十五以上の  
イチゴ園を経営している。年間生産量は三百万トン  
で、このうち三百三十トンが県内出荷、残りを福岡市  
や東京へ。佐伯イチゴは昭和二十七年（一九五二）  
ごろから、一部の農家が水田の裏作などに露地栽培  
として手がけたのが始まり。しかし、そのころの販  
路は佐伯市内に限られており、収益性も低く、作柄  
も不安定だった。本格化したのは六十三戸の農家が  
集まって「イチゴ生産研究同志会」を結成した昭和  
四十三年から。この翌年には、早くもビニール栽培  
が始められた。このため、収穫期間が十二月上旬か  
ら五月下旬までに延び、収穫量が増大。安いイチゴ  
の供給となって地元の潜在購買力の掘り起こしにも

役立った。四十七年度には、県農業賞・集団の部で最優秀賞を獲得している。イチゴづくりは、四月の親株の植え付けで始まる。七月の子苗移植に続いて花芽分化を早める作業があり、十月には保温を開始、十二月から収穫ができるようになる。収穫されたイチゴは、各農家が選別とパック詰めを行い、農協の出荷所へ。品質（秀・優）や大きさ（3L、2L、L、M、S）、重量（一パック三百四十g以上）などを、厳格に検査したうえで共同出荷する。東京へ送り出したのは昭和四十八年から。同五十一年度は、約九十tを東京市場へ出荷することになっている。暖かい県南地方独特の「甘さと香り」で、関東での人気は上昇中という。佐伯市農協では、「県内のビタミンの一大供給地」として、今後、栽培面積の拡大、収量の増加、品質向上を目指し、当面、一日一万パックの出荷を目標にしている。また、昭和六十年（一九八五）までに三十haの大型イチゴ団地づくりの計画も。小売価格は一パック当たり百五二円から五百円。年末から三月までは高価だが、四月から五月にな

ると二百円前後となり、消費者には手ごろ（『朝日新聞』昭和五十二年二月二十六日版）。



木立いちご（『市勢要覧』1977年より引用）

【注】(82) 『佐伯市総合計画・一九八三』（佐伯市）

(83) 矢野彌生「大分県南の園芸農業について」

（『大分県地理第9集』大分県地理学界

昭和四十四年）

(84) (83) に同じ

（※以下次号へ）